

六甲越えの古道—唐櫃道—について

唐櫃道（からとみち・現在のシュラインロード及びアイスロード）は江戸中期に開かれた六甲山を南北に貫く古道で、魚屋道（ととやみち）と並んで六甲山の2大古道といえる。



図1-1 六甲越(鉄道以前)

魚屋道は、東灘区深江浜から六甲山最高峰越えで有馬に下る道として早くから整備され、殊に明治7年に大阪—神戸間の鉄道が開通して以降は、住吉駅から六甲越えで有馬に行く温泉客が急増し、多くの文人、俳人もこの道を舞台に作品を書いている。



道り降へ泉温馬有 越吉住山甲六
THE WAY TO ARIMA TO GO OVER
ROKKOSAN FROM SUMIYOSHI.

それに比し、唐櫃道は上唐櫃から前ヶ辻を経て御影・住吉方面に到る生活物資交流の道として活用され、今なお昔の静かな面影をとどめている。

江戸中期より開発された唐櫃道は、

『女達は頭に柴を戴き大原女そっくりの姿をして、この山道を御影の町へ商いに通ふし、御影からの商人はこの山越に唐櫃の村へ色々な日用品を売りにきた』

(「六甲」竹中 靖一・1933年)

そして、男達もこの九十九折のこの道を

『牛馬の背に酒米や農・林産物を灘方面に運搬し、灘方面からは海産物を持って帰った』

(「有野町誌」有野町更生農業共同組合・1988年)

とあるように、江戸末期から明治にかけて、かなり多くの人の往来があったようである。



この道は、『唐櫃方面では、「住吉越え（あるいは六甲越え）」、御影・住吉方面では、「唐櫃越え」と互いに峠の向こうの村落の名称を冠して呼称していた』（「歴史と神戸」91号・山下論文・1978年）ようで、双方で呼称が異なっていたのも興味深い。

唐櫃道は、『昼間でも暗く、大きな松や杉が茂った曲がりくねった坂道で（中略）、日が暮れると天狗や魔物が出て通行人や牛を食い荒らすと伝えられており、どうしても山道を夜越える時は、魔物除けに麓の四鬼家から「四鬼」と書いた提灯を借りるか、火縄をもらって行く』（「有野町誌」・1988年）のが通例で、この提灯や火縄を持って行くと、安全に夜の山越えができたということである。

ちなみに、四鬼家は先祖が修験者で唐櫃村の開祖と伝えられている家柄である。

1825年（文政8年）にはこの険しい山道を利用する人の道中無事、家内安全、商売繁盛を願って地元の人達により、西国三十三ヶ所になぞらえた石仏が建立されており

これが今も残る37体（33体及び番外4体）の石仏群である。

石仏には、願主として、丹波杜氏、水車小屋の親方、唐櫃の女中達、兵庫の魚屋、五社（注・有野町内の地名）の酒屋、油屋、三木の金物屋などの名前が刻まれている。

これ等の石仏群は、石造遺産としての価値はともかく山村の観音信仰を語り伝える貴重な文化遺産と言える。

これ等の石仏群の他にも第27番石仏の近くにある「行者堂」は石仏群よりさらに古く、今残っているものは、1804年（文化元年）に唐櫃村庄屋・鍋屋太右衛門により再建されたものと言われている。（「六甲山博物誌」王起 彰三・1997年）



(勝名甲六)
堂者行
Souvenir of Rokko

この付近は、昔、修験者の修行場であったとも伝えられており、別名「行者道」と呼ばれていたのは、そのためである。

これ等の野仏群や行者堂等の遺跡群が立ち並んでいるため、明治末より六甲山上に住むようになった外人達からこの道は「シュラインロード」と呼ばれるようになり、現在ではこの名称が一般的となっている。

一方、表六甲の丁字ヶ辻から六甲への道は、明治10年代から昭和4年まで六甲山上の天然氷を下界へ運搬したことから、外人たちに「アイスロード」と呼ばれ始め、今では昔の「前ヶ辻道」と呼ばれることは殆ど無くなった。

こうした横文字名が多いのも、六甲山の特色の一つである。